

31—八 国 語

国 語

- 注 意
- 1 問題は 1 から 5 までで、11 ページにわたって印刷してあります。
  - 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
  - 3 声を出して読むはいけません。
  - 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
  - 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の ア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や**。**や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
  - 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
  - 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の――線を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 新しい小説を著す。
- (2) 作品は出色のできばえである。
- (3) レモンのさわやかな芳香が漂う。
- (4) 並大抵ではない努力をする。
- (5) 子どものように天衣無縫なふるまいをする。

2

次の各文の――線を付けたかたかなの部分にあたる漢字を楷書で書け。

- (1) 民主主義の理想を国民にトク。
- (2) 会見の内容をサイダイ漏らさず報告する。
- (3) 試合で実力をハツキする。
- (4) コキミのよい音楽が聞こえてくる。
- (5) 用件をタントウチヨクニユウに言う。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

ある大学の映像学科四年生である「僕」と安原は、卒業制作映画の監督の座を争ったライバル同士である。結局安原が監督になり、「僕」は卒業制作映画『終わりのレイン』の制作チーム「安原組」の助監督となった。安原組は、才能はあるが無名の役者である双海大樹を主演として撮影を始めることとなった。

昼も夜も関係なく容赦のない気温が続く九月。今日、『終わりのレイン』は克蘭クインを迎えた。

「双海さん。」

主役である羽田野透役を務める役者、双海大樹の元に歩み寄った安原は、床に座り込んだ彼を見下ろす。長身の安原に見下ろされ、双海は安原を仰ぎ見る形になった。

「動きは、今のでいいんですが、もう少し、焦ってもらいたいです。」

安原の言葉に双海は顔を痙攣させるようにして瞬きをし、額の汗を拭いた。

「監督の指示通りにしたつもりですけど。」

鋭い棘を感じさせる声色で、双海は言う。

今日撮影するのは、主人公である羽田野透が自宅アパートで、将来が見えず卒業制作も進まず、悶々と過ごすシーン。初日ということ、だいぶ余裕のある撮影スケジュールになっていた……はずなのだが、僕は腕時計で時間を確認した。あんなに余裕のあるスケジュールだったのに、気がつけばカッカッになってしまっている。

最初だからしょうがないか、と思いつつも、溜め息を堪える。

「今の羽田野からは、上手く行かないことへの苛立ちとか……そういうの

はしつかり伝わってきます。でも、焦りがないんです。怒りとか憤りだけじゃなくて、どうしようどうしようという焦りとか、このまま絵が描けなかったら、っていう恐怖感がほしいです。」

考え考え、ときどき突っかかりながら話す安原の顔を、双海は真っ直ぐ見ていた。ただ、よくわかる。安原の言葉が双海の中に入っていないのが。

あーあ、見ていてもどかしい。僕がさっと出て行って、安原に「要するにこういうことだろっ？」と問いただし、双海に「つまりこういうことですから！」と言ってやりたくなる。

それを堪えるのも、やはり今日何度目かのことだった。

「そんなこと、リハのときは言っただけですよね。」

「それは、すみませんでした。」

素直に頭を下げた安原から、双海が顔を背ける。その口が微かに動くのが見えた。舌打ちだった。音の出ない、舌打ち。ああ、こういうことか。僕はああやって、舌打ちしてたんだ。

「後出しばかりされたらやってる方は堪らないって、想像できませんか。」

嫌みったらしい言い方に、安原が「はい、すみません。」と再び頭を下げる。

「でも、俺はここで、羽田野に焦ってほしいです。今演じてくださったように、怒ってもほしいです。」

お願いします、と再三頭を下げた安原の横から、サード助監督の木脇がすっとミネラルウォーターのペットボトルを差し出す。

「とりあえず、水分補給してください。」

不機嫌そのものという顔の双海にっこり微笑んだ木脇は、双海に汗を拭くためのタオルも渡してやる。おかげで安原と双海の間にあった——正確には双海から安原に一方的に向けられていた刺々しい空気が、ほんの少

し和らいだように錯覚する。

「もう一度、お願いします。」

もう一度。今日何度、安原のこの台詞せりふを聞いたことだろう。安原はクライン初日から容赦がなかった。今日は主役の双海しか出番がないけれど、少しでも自分の思った絵が撮れなかったら、何度だってリテイクしてやるという顔をしていた。それに付き合う役者もスタッフも、当然、しんどい。本当ならそこに折り合いをつけて、周囲の人間のモチベーションを下げることなく進行させるとか、とことんやるなら後々ちゃんと相手をフォローするとか、そういうことが必要なのだろうけれど。

「無理だよなあ……。」

誰にも聞こえないよう、僕はこぼした。安原にそんな芸当を求めるのは無理があると、僕自身が一番よく知っている。なら、あとでこっちがやるしかない。

『終わりのレイン』の主人公・羽田野透の住む部屋として撮影に使っているアパートの一室は、蒸し暑かった。狭い台所と、四畳ほどのダイニング。それにガラス戸を隔てて六畳間があるだけだ。エアコンは設置されているが、電源が入っていない。六畳間には羽田野を演じる双海と監督である安原、カメラや照明、録音のスタッフが数人いるだけだが、ダイニングにはそれ以外のスタッフがひしめき合っている。九月上旬にこんな状態でしたら、暑くないわけがない。全員が、肌にとりと汗をかいている。年季の入った木造のアパートは、鼻の穴にまとわりつくようなじめつとした香りがした。

「じゃあ、本番行きます。」

安原からの合図を受け、セカンド助監督の橋本はしもとが部屋の外まで聞こえるように「本番始まりまーすっ！」と叫ぶ。「本番です。」「本番行きます。」と言葉はどんどん伝言され、アパートの外にいるスタッフにまで届く。

木脇がカチンコ\*を構える。カチンコを打つのはサード助監督の仕事だ。

その黒板部分には、\*シーン番号、カット番号、テイク数がチョークで殴り書きされていた。

「シーン1の3の5、用意。」

\*箱馬\*に腰を下ろした安原が、脚本を片手に双海の横顔を睨にらみつける。そんな安原のことを、双海がきつと睨み返した。スタッフ全員が、息を止める。

双海だけが、大きく息を吐き出す音がした。

「カメラ、回りました。」

撮影監督の原田はらだがカメラから目を離すことなく言う。

「よーい……スタート！」

安原の声に合わせ、木脇がカチンコを鳴らす。カン！<sup>(2)</sup>という乾いた心地ちのいい音とは裏腹に、胃が、心臓が、耳の奥が、きゅつと締め付けられるように痛んだ。

国立大の法学部に通う大学生の部屋は、安原組のスタッフによって美大生の部屋に生まれ変わった。六畳の畳部屋は画材や羽田野の描いた作品があふれている。この部屋で油絵が描かれたことなどないだろうに、部屋中から、油絵の具の匂いが漂ってくるようだ。

畳あぐらの上で胡座をかけた羽田野は、壁に立てかけた巨大なキャンバス\*を見上げる。真っ白だ。彼の周囲には絵を描くための道具が転がっているが、彼はそれに手を出さない。

ただひたすら、目の前の真っ白な——空っぽなキャンバスを見つめる。キャンバスに彼の方が飲み込まれてしまいそうなくらい、彼の横顔には焦燥や困惑、自分自身に対する憤りの色が浮かんでいる。

突如頭を抱えた彼は、畳を拳で叩たたきつける。ずりつ、と畳と手が擦れる音がして、羽田野は顔を上げる。彼の顔には何かに追われているような、ここから逃げないと叫んでいるような、確かな焦りが存在していた。<sup>(3)</sup>彼の抱える濁った感情が、伝わってくるようだった。

羽田野の動きに合わせ、原田がカメラをゆつくりと動かす。ブームという長い竿の先にマイクを取り付け、録音の坂井マリが、呼吸すら止めているような顔で役者の声を拾う。

「——カット！」

安原の声に、カチンコの音が続く。張り詰めていた空気が、ほんの少し緩む。このわずかな緩みも、ずっと渦中かまろにいると心地がいい。

同時に、僕はほっと胸を撫なで下ろした。安原が次に言う台詞が、予想できたから。

「OKです。ありがとうございます。」

<sup>(4)</sup> 安原の声はそれでも、ピンと張り詰めていた。

(額賀滯「完パケ！」による)

〔注〕クランクイン——映画の撮影を開始すること。

突っかかりながら——ひっかかりながら。

リハ——本番前の練習。リハーサルの略。

リテイク——撮影し直すこと。

カチンコ——撮影開始と終了の合図をするための道具。

シーン番号、カット番号、テイク数——編集のために、撮影の場

面や撮影回数を識別する番号。

箱馬——撮影で使用する木製の箱。

キャンバス——絵を描くための画布。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 素直に頭を下げた安原から、双海が顔を背ける。とあるが、この

ときの双海の心情を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の演技に文句をつける安原の高圧的な態度や言葉遣いに、抑えきれない怒りを覚えている。

イ 今まで聞いていなかったような指示を出され、どう演技をしいのかわからなくなり混乱している。

ウ 監督が小さなことにこだわるので、これからの撮影をやっていけないのではないかと不安になっている。

エ 指示にはなかった注文をつけられ、演技し直しになることにやり場のない苛立ちを覚えている。

〔問2〕<sup>(2)</sup> カン！という乾いた心地こちのいい音とは裏腹に、胃が、心臓が、耳

の奥が、きゅっと締め付けられるように痛んだ。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 撮影は再開したが険悪な空気は変わらないので、自分の方がうまく進められるのと思いい、監督になれなかったことに情けなさを感じているから。

イ 張り詰めた空気の中で撮影が再開され、双海が安原の求めているような演技をし、無事にこの場面が撮り終えられるようにと強く願っているから。

ウ 気持ちの整理がつかないまま撮影を再開したが、助監督である自分がこのようなもめ事をうまく収められなかったので、自責の念にかられているから。

エ 意気込んで撮影を始めたのに、最初から衝突するような状態ではみんなのやる気を維持していけないだろうと、絶望的な気持ちになっているから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 彼の抱える濁った感情が、伝わってくるようだった。とあるが、

「濁った感情」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 絵が描けない自分に憤るとともに、このまま時間だけが過ぎていったらどうしようかと焦りを感じている。

イ この先自分が絵を描いたとしても、世の中に評価されないのではないかと感じ、不安を覚えている。

ウ 絵を制作するための部屋がなく、蒸し暑く狭いアパートの一室で絵を描かねばならない境遇に憤りを覚えている。

エ 制作の期限が迫っていることに焦りつつも、自分の才能のなさを悲しみ、絵を描くことに疑問を感じている。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 安原の声はそれでも、ピンと張り詰めていた。とあるが、このと

きの安原の様子を五十字以内で書け。

〔問5〕 本文の表現を説明したものととして最も適切なのは、次のうちでは

どれか。

ア 登場人物それぞれの目を通して見た世界を描き分けることで、撮影に集中する彼らの心情が生き生きと表現されている。

イ 目に見えるものだけでなく音や匂いを描写することで、読者に、実際にその場にいるように感じさせる効果を与えている。

ウ 擬態語や短い会話文を多用することで、読者が登場人物に感情移入しながら読み進めることができるようになっていく。

エ 会話に丁寧な言葉遣いを挿入することで、登場人物の間に上下関係が存在し、人間関係が複雑であることを示している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

コインに裏と表があるように、すべての事象には二面性があり、プラスにもマイナスにも働く。科学や技術も例外ではない。原爆や水爆のような悪の側面しかないという例外的なものもあるが、科学・技術のほとんどの成果は人間にとって正負両面の効果を持っているのだ。薬と毒は紙一重というように、使い方次第で結果が正反対になることが多い。コンピューター<sup>(1)</sup>は、それ自身完全に価値中立だが、戦争のシミュレーションにも気象予報にも使える。また、ものの見方によって二つの評価に分かれることもある。「優柔不断でなかなか決断できない」性格は、異なった観点から見れば「慎重で考え深い」性格とも言える。さらに、科学にはわかっている部分とわかっていない部分があり、それをきちんと区分けして判断しなければ間違ふことがある。わかっている部分だけを取り出して一方的に否定したり、わかっている部分であってもあたかも未知であるかのように言い立てて切り捨てたりするからだ。

考え得る科学の二面性を挙げてみると、次の点に集約されるのではないだろうか。それは、科学の効用 vs 科学の弊害である。

効用とは、科学の成果によって人々が社会生活を送る上での利便性が向上したり、社会的生産力が増加したりすることによって、人類が生きていくことにプラスとして働く側面である。一〇〇〇年前とは言わずとも、科学が実生活に入り始めた一〇〇年少し前と比べてみれば、どれほど人々の生活レベルが上がったかを見れば歴然とわかる。また、小さな空間に閉じていた人々が経験する世界も格段に拡大し、今や地球を越えて広大な宇宙へと広がっている。具体的には、病気の治療や薬の開発によって健康が維持できて寿命が長くなり、食糧増産が可能になってより多くの人間が養え、大量生産によって高い品質の製品が安く手に入るようになった。通信・

交通・輸送の手段が向上し、それらに要する時間が短くなって能率的になり、情報が簡単に手に入り、遠い外国へも容易に行けるようになった。メガネや望遠鏡や顕微鏡は目の、補聴器は耳の、クルマや電車や飛行機は足の、さまざまな道具は手の、コンピューターは脳のというふう<sup>(1)</sup>に、人間が持っているそれぞれの器官の能力を拡大してくれるという効用もある。まさに科学のおかげで、人々の世界が広がり優雅な生活を満喫できるようになったのだ。社会の成長と発展は科学によってもたらされた、科学様々なのである。

このように生活の向上や生産力の増加は、人間の可能性を拡大する上で大きなプラスとなったことは誰も否定できない。科学・技術の恩恵を受けて健康で安逸な生活を送ることができ、食糧の増産が可能になって多くの人口が養えるようになった(まだ飢餓で一日に二万人の子どもたちが亡くなっているが、食糧の分配が問題であることは、現在の食糧生産力で一〇〇億人は養えると推算されていることからわかる)。科学が人類にさまざまな効用をもたらしたが故に、科学は社会に受容されてきたのである。

しかし、科学に起因する事故が起こったり、その過剰な使用によって個人の不幸や社会的損失も増えることになった。それが科学の弊害であり、無視することはできない。さまざまな事件・事故は科学が原因となっており、なかでも公害では悲惨な犠牲者を多く出し、現在は地球環境問題として人類の未来に暗い影を投げかけている。人の命を救い健康を取り戻すことを目的としたはずの薬による害は相変わらず現在も起こっている。便利になり時間が短縮されたことは、逆にますます人間を忙しくさせ、よく考えないまま対応してしまう、従って人々の思考は長期的な視点を欠き短絡的になっている。人間の器官の能力が拡大したように見えるが、それによって手足が弱って不器用になり、計算ができなくなり、漢字が思い出せなくなるといような、人間が本来持っている能力を喪失させている側面もある。そして、迷路のような地下街、高層ビルディング、時速三〇〇 km

の列車、何百人も運べる航空機など、効率性を求めたが故にいったん事故が起これば多大な犠牲者が出るのは当然である。

とはいえ、効用と弊害を並べてみれば、人々が効用の方を選ぶのは確かである。今更、不便で不衛生で不効率な世界に戻ることは考えられず、現実に生きている社会は科学の運用によって問題なく機能しており、何らかの決定的な異常が生じない限り特段困ることもないからだ。そのため、科学によって支えられている現在の生活や社会を否定する気にはなれない、そう誰もが考えていることも確かだろう。人間の歴史において（少なくとも先進開発国に住む私たちは）、最も安全で健康的で幸福な生活を送ることができているのである。

しかし、「それが永続するのか」と問われれば、疑問符がついてしまう。<sup>(2)</sup> 科学の弊害の多くは人類の未来に投げかけられている困難であり、未来世代の人たちも私たちと同じ条件や同じ環境で生きられるという保証はない。地下資源を使い尽くそうとしていて、それを利用した文明はいずれ終焉を迎えるだろう。また、化石燃料の過剰使用による地球の汚染は深刻になる一方で、気候変動による人間の生息環境の大きな変化が生じ人類の持続可能性について疑問符が付いてしまう。そして、世界がグローバリゼーションによって均一化し同質化していく結果、単純な理由で世界全体が共倒れする危険性も否定できない。科学の発達による多様性の喪失は、生命が多種多様なものに進化してきた論理と逆行しているためである（現在においても、既に人間の活動によって多くの種が絶滅している）。そろそろ成長と発展の論理から、定常的<sup>\*</sup>で持続性を最善とする社会へ移行すべきではないか、というわけである。

このように考えると、短期的には効用が上回っているが、長期的には弊害が徐々に拡大し、人類の未来が危ういと思わざるを得ない。といっても、科学の効用と弊害はコインの裏表と同じで、どちらか一方だけを切り出すというわけにはいかないことが多いのは事実である。効用は（状況次第で）

弊害に簡単に転化するからだ。また、現在の私たちにとっては効用だが長時間先の未来になると弊害に転化するように、時間スケールによって評価が変わるのだから先々を考えて科学の採否を判断しなければならぬ。効用は即効性だが、弊害は蓄積性があることに特徴があるからだ。効用と弊害をしっかりと見極めながら科学の成果の選択することが求められているのである。

<sup>(3)</sup> 今や科学の恩恵に首まで浸っているのだから、今更科学を否定するわけにはいかないと考えはするものの、「科学はもう沢山！」という声や、「科学も程々に」という感想も多く聞かれるようになった。「地球へ負荷をかけるばかりだ」と心配し、「これ以上便利にする必要はない」と思うためだろう（と思いつつも、より便利なものが発明されるとつい手を出してしまうのだが）。そこで出てくるのが、「科学をコントロールすべき」との意見である。「科学が余りに発達し過ぎたから」という理由であり、「科学が野放図に拡大しているから」とされているためだろう。科学を大本で取り縮まれというわけである。といっても、科学者はコントロールされることを拒否して自由な研究を望んでおり、それはまた「未知を既知にしたい」という人間の好奇心・探究心を大事にするためにも不可欠なことなのである。単純に言えば、弊害をいかに小さくしつつ効用を最大にするか、が科学の目標になる必要がある。とはいえ、右に見たように効用と弊害の自身や時間スケールが異なるために、そう簡単なことではないと言える。

（池内了「科学・技術と現代社会」による）

〔注〕 シミュレーション——現実に取りこりそうな状況を仮に作り出すこと。

グローバリゼーション——経済活動が地球の規模で行われるようになること。

定常的——変わらないということ。

〔問1〕<sup>(1)</sup> コンピューターは、それ自身完全に価値中立だが、とあるが、「コンピューター」が「価値中立」であるとはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア コンピューターは発明されてからまだ歴史が浅いため、現時点では社会的な価値が定まらないということ。

イ コンピューターは善悪の二面性を持っているので、価値があるかないかを論じることはできないということ。

ウ コンピューターは高度な性能を備えているが、その価値は誰がどのような目的で使うかによって決まるということ。

エ コンピューターは、それを使いこなせる人がいなければ、それ自体では何の役にも立たないということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 科学の弊害の多くは人類の未来に投げかけられている困難であり、とあるが、なぜ「未来に投げかけられている困難」と言えるのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 現在の私たちは確かに科学の効用を選ぶが、未来の人類も同じように効用の方を選ぶかどうかはわからないから。

イ 科学の弊害は長時間先の未来にならないと発生しないため、効用を受けている現在の私たちには関与できないことだから。

ウ 科学の効用と弊害は切り離すことができないうえ、現在の私たちには効用でも未来には弊害に転化する可能性があるから。

エ 現在の私たちの技術では科学の弊害を解消することができないため、それを未来の技術に託すしかないから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 今や科学の恩恵に首まで浸<sup>つか</sup>っているとあるが、「科学の恩恵に首まで浸っている」とはどういうことか。五十文字以内で書け。

〔問4〕 本文の表現と構成を説明したものととして、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 科学のあり方について、現在私たちの抱えている課題を踏まえながら、具体例を多く用いて筆者の主張を理解しやすいように示している。

イ 科学のあり方について、最初に結論を述べ、具体例を多く用いて説明し、最後に結論を再び述べることで、筆者の主張を印象づけている。

ウ 科学のあり方について、筆者とは異なる立場の考え方を引用し、それと比較しながら、筆者の意見を理解しやすいように説明している。

エ 科学のあり方について、逆接の接続詞を多く用い、直前の内容を否定してから、新しい意見を述べるというやり方で論を展開している。

〔問5〕 本文を読んで、今後私たちは科学とどのように向き合っていけばよいと、あなたは考えるか。根拠を明確にしながら、二百四十文字以内で書け。なお、や・や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

跡もなき庭の浅茅あさぢにむすばほれ

露のそこなる松むしのこゑ \* 式子内親王

表面的に見ればこれは、秋の淋さびしい荒れはてた庭の片隅で、露の底に沈んだように忍び鳴いている松虫の声を詠よんだ歌です。一首の大意は、「人の訪れた形跡もない庭の、背の低い雑草のあいだで、結んだ露にみずから結ばれて、その露の底から低く響いてくる、松虫の声よ」というような意味でしょう。

(1) しかしもちろんこの歌はただそれだけのことを言っているものではありません。「跡もなき」というのは、足跡も絶えたこと、つまり男が訪ねても来なくなった女が主人公であることを意味しています。この歌は、表面の意味の下に女の嘆きを隠しているのです。「松むし」とは、日本の秋の庭でしきりに鳴いている上品な鳴き声の虫ですが、日本語の「マツ」という発音は、樹木の「松」、「松虫」の「松」を意味すると同時に、動詞「待つ」をも意味するのです。

したがって、この歌の「松虫」の語は、同音の縁で「待つ虫」ともなり、男を待ちわびている女のイメージが自然にそこに託たくされているのです。また、「結ばほれ」という動詞も、ひとつには露が結ぶことを意味しますが、同時に、心が鬱屈うっくつして少しも開放されないことを意味する語です。さらに、「露」という語も、を暗示するととるのが、日本の詩の修辞\* 修辞では普通のことでした。

つまり、これは表面的には秋の淋しく荒れた雑草の庭で、露に濡ぬれそぼちながら低く上品な声で鳴いている虫を詠んでいる歌ですが、同時にそれは、松虫の声のように美しく上品な女が、今なお彼の訪れを心待ちにしながら、ひっそりと涙にくれている姿をもえがいているわけです。

少し立ち入って説明するなら、和歌は五七五七七の短い詩型ですが、日本人はこれができるだけ豊かに響かせるために、一つの語の意味を二重に、場合によっては三重にも重ね合わせる技法を編みだしました。その場合、子音と母音の単純な組み合わせを基本とする日本語の音韻構造は、同音異義語を大量に生み出すという特性のため、かえってこの目的には非常によくかなったのでした。「懸\* 懸けことば」とか「縁語\* 縁語」とかの和歌独特の技法がこうして生まれました。式子の歌の「むすばほれ」、「露」、「松むし」などの言葉はみなそれです。

いずれにせよ、こうして、一見単純な風景描写でありながら、実は一人の女あるいは男の心のひそかな (2) たたずまいを裏側の真の意味として表現しているような歌は、古典和歌では普通に見られる一つの常套じょうたうでさえありません。それは言ってみれば、わかってくれる人だけに秘密を開いて見せる、一見さりげない風景であり、しかも風景としてだけ見てもそれなりに人を満足させるだけの美しさはそなえているという詩法でした。

当然そこには多くの約束事が生じ、\* さま 瑣末な形式主義が膨張し、素朴な感動よりは、やたらに知識をふりまわす物知りの通人趣味が重んじられるような事態となりました。近代に至って、このような (3) 詩の技法と詩自体との矛盾は覆いがたくなり、その結果、目立ちやすい「懸けことば」のような技法は捨てられました。

しかし、式子内親王のころには、もちろんこうした技法は十分に生きて働いていました。彼女はこうした技法を駆使して、虚構の世界で恋する女を描き、秋の虫の声と女の悲しみの涙とを一首の和歌の中で同時に描きだしたのでした。 (4)

この場合、彼女自身がこの廃屋同然の家に住む女であるということは必要ではなく、ただ与えられた題によってこういう一人の女の環境を想おもい描き、その女にふさわしい風景と、内心の悲しみを、同時に一首の短い歌の中にきざみこむだけでよかったです。しかもなお、読者たる私たちは、あの女の心の中には、高貴な孤独の人式子内親王自身が

いたのかもしれないと想像することも許されているのです。

すなわち、日本の古典和歌では、歌われている作中人物と作者自身は同一であるのが当然という近代的なレアリスム\*は、自分の生活を直接叙述し、人生観をのべるといった限られた場合を除けば、ほとんど存在しなかったのです。歌人とは、想像力の世界で容易に他人に成り変ることもできる人のことでした。しかも、そのような能力を駆使しつつ、作品の奥底に作者自身のまぎれもない個人的な思想、感情が生き生きと表現されているとき、その作者たる女性あるいは男性の歌人は、幅広く柔軟な才能をもった一流詩人と見なされたのです。

(大岡信「日本の詩歌」による)

〔注〕 式子内親王——平安時代末期の歌人。

修辞——表現技法。

懸けことば——発音の共通性を利用して一語に複数の意味をもたせること。

縁語——ある言葉と意味の上で関係の深い言葉を使って表現効果を上げること。

常套——ありふれたやり方。

瑣末——重要でない、小さなこと。

レアリスム——現実主義。

〔問1〕<sup>(1)</sup> しかしもちろんこの歌はただそれだけのことを言っているものではありません。とあるが、「この歌」は他にどのようなことを意味しているのか。十五字以上二十字以内で答えよ。

〔問2〕 本文中の□には、漢字一字が入る。それを本文中から探し、そのまま抜き出せ。

〔問3〕<sup>(2)</sup> たたずまいの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

- ア 礼儀
- イ 願望
- ウ 悲哀
- エ 様子

〔問4〕<sup>(3)</sup> 詩の技法と詩自体との矛盾とはどういうことか、次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 五七五七七という短い詩型であるのに、多くの内容を盛り込もうとするため、詩の形式として無理があるということ。
- イ 内容を豊かにするための表現技法であったのに、感動よりも表現の巧みさを磨くことが目的化してしまったということ。
- ウ 裏側に真の意味が込められていても、一見単純な風景描写であるために、言葉と伝えたい内容とがかみ合っていないということ。
- エ 一つの語の意味を複数重ね合わせる表現技法を編み出したのに、一部の物知りにはか理解されなかったということ。

〔問5〕<sup>(4)</sup> この場合、彼女自身がこの廃屋同然の家に住む女であるということとは必要ではなく、ただ与えられた題によってこういう一人の女の

環境を想い描き、その女にふさわしい風景と、内心の悲しみを、同時に一首の短い歌の中にきざみこむだけでよかったです。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 日本の古典和歌では、作者とは無関係の虚構の世界を表現するのに、いかに表現技法を巧みに用いるかが重要であったということ。
- イ 日本の古典和歌では、作者自身の現実として和歌に詠み込まれるべきなのは、さりげなく美しい風景の方だったということ。
- ウ 日本の古典和歌では、作者自身の生活を直接叙述し、人生観をのべることは風流ではないとされ、避けられていたということ。
- エ 日本の古典和歌では、作者は与えられた題の中で他人に成り変り、そこに自身の個性を表現することが尊ばれたということ。

